

Bulletion of Kagoshima
Prefectural Archaeological Center

From JOMON NO MORI

No. 16 CONTENTS

Cave ruins in Kagoshima Prefecture.

Yubasaki Tatsumi

Supplement to the Komaki site and some consideration

The research department of Kagoshima Buried Cultural Property
Reserch Center

The pit dwelling house which is in the Kofun period excavated
in Komaki remains in Kagoshima Prefecture

Kawaguti Masayuki

Investigation of Uwai Castle Ruins in Kirishima City

Kurokawa Tadahiro

Study on the route between Satuma koku Taki and Nodae

Higashi Kazuyuki

Annual of Kagoshima Prefectural Archaeological Center of the
4nd year in Reiwa.

Kagoshima Prefectural Archaeological Center
October 2023

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第16号

鹿児島県の洞穴遺跡の集成
—洞穴遺跡の概要と調査の状況—

湯場崎 辰巳

鹿屋市小牧遺跡の補遺と若干の検討
(公財)埋蔵文化財調査センター 調査課

鹿屋市小牧遺跡で検出された竪穴建物跡 (SH20) の性格について

川口 雅之

霧島市上井城跡の踏査

黒川 忠広

薩摩国高城—野田間の道筋について

東 和幸

令和4年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター
2023.10

研究紀要・年報

縄文の森から

第16号

二〇二三

鹿児島県立埋蔵文化財センター

『縄文の森から』第16号 目次

鹿児島県の洞穴遺跡の集成一洞穴遺跡の概要と調査の状況一

湯場崎 辰巳・・・・・・・・ 3

鹿屋市小牧遺跡の補遺と若干の検討

(公財) 埋蔵文化財調査センター 調査課・・・・・・・・ 17

鹿屋市小牧遺跡で検出された竪穴建物跡 (SH20) の性格について

川口 雅之・・・・・・・・ 35

霧島市上井城跡の踏査

黒川 忠広・・・・・・・・ 41

薩摩国高城一野田間の道筋について

東 和幸・・・・・・・・ 49

令和4年度年報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69

鹿屋市小牧遺跡で検出された竪穴建物跡（SH20）の性格について

川口 雅之

The pit dwelling house which is in the Kofun period excavated in Komaki remains in Kagoshima Prefecture

Kawaguti Masayuki

要旨

鹿屋市小牧遺跡の竪穴建物跡（SH20）について、貼床上面で検出された土坑や壁際溝、出土遺物の再検討を行った。SH20は出入口に関わる施設や、住居廃絶に関わる祭祀行為を確認することができ、古墳時代の竪穴建物跡を研究する上で重要な資料である。

キーワード 竪穴建物跡、出入口、壁際溝、廃屋儀礼

1 目的

鹿屋市小牧遺跡は、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である（第1図）。東九州自動車道建設に伴って平成27～29年度に発掘調査が行われ、発掘調査報告書は平成30年～令和4年度に刊行されている。

本論で取り上げる遺構名SH20は、古墳時代の竪穴建物跡（住居跡）である。筆者は、平成29年度に調査担当者としてこの遺構の調査に関わり、住居の出入口や祭祀跡と考えられる痕跡を確認することができた。

残念ながら、発掘調査報告書には、この点について、具体的に記述できなかったようである。そこで、再度、調査時の図面・所見等を整理し、SH20の調査成果について補足説明を行いたい1）。

2 SH20の報告

(1) 概要

SH20は長軸5.7m、短軸5.46m、深さ約0.3mで、南側の一部が張り出した方形竪穴住居跡である（第2図）。貼床上面で炉跡とみられる痕跡、柱穴、土坑、壁際溝、そして壁

際溝と並列するように小ピットが検出された。住居跡の時期は、埋没途中で廃棄された笹貫式土器及び土器附着炭化物の年代から、古墳時代中期～後期前半頃（5世紀前半から6世紀前半）と考えられる。

(2) 埋土・遺物出土状況について

竪穴内の埋土は地山のIV層土がベースとなっている。埋土の形成過程の違いによって、5層に細分を行った（第1図上）。埋土①層は、住居廃絶後の自然埋没土で、地形の高い西側から流入している。②層が貼床（硬化面）である。③層は土坑の埋土である。④層は壁際溝、⑤層は壁面構築に関連する埋土である。

遺物は、貼床上面で完形の鉢形土器や台石、ベンガラ、異形鉄器、白玉・小玉（碧玉・滑石）が出土した（第3図）。各遺物は床面に散在した状態であった。玉類が出土したため、ふるい掛け作業を行った。玉類は貼床上面でのみ検出され、散布された状態に近い。また、磁石を使って鍛造薄片等を探したが、検出されなかった。

このほかに、①層で笹貫式土器の土器溜まりを検出した。住居使用時の遺物ではないが、廃棄された状態で一括性の高い資料である。そのほかの遺物は、住居が自然埋没する過程の流れ込みである。

(3) 貼床について

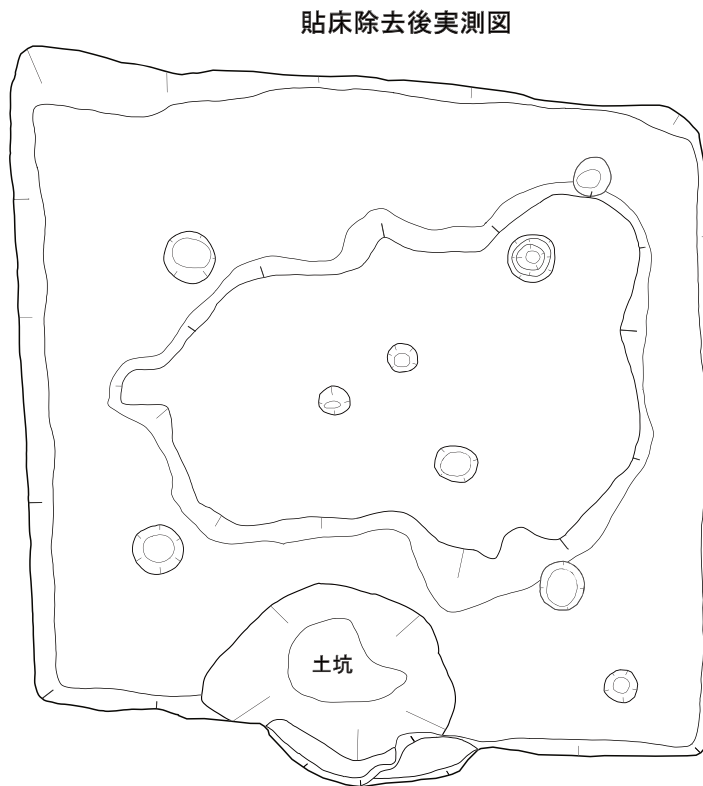
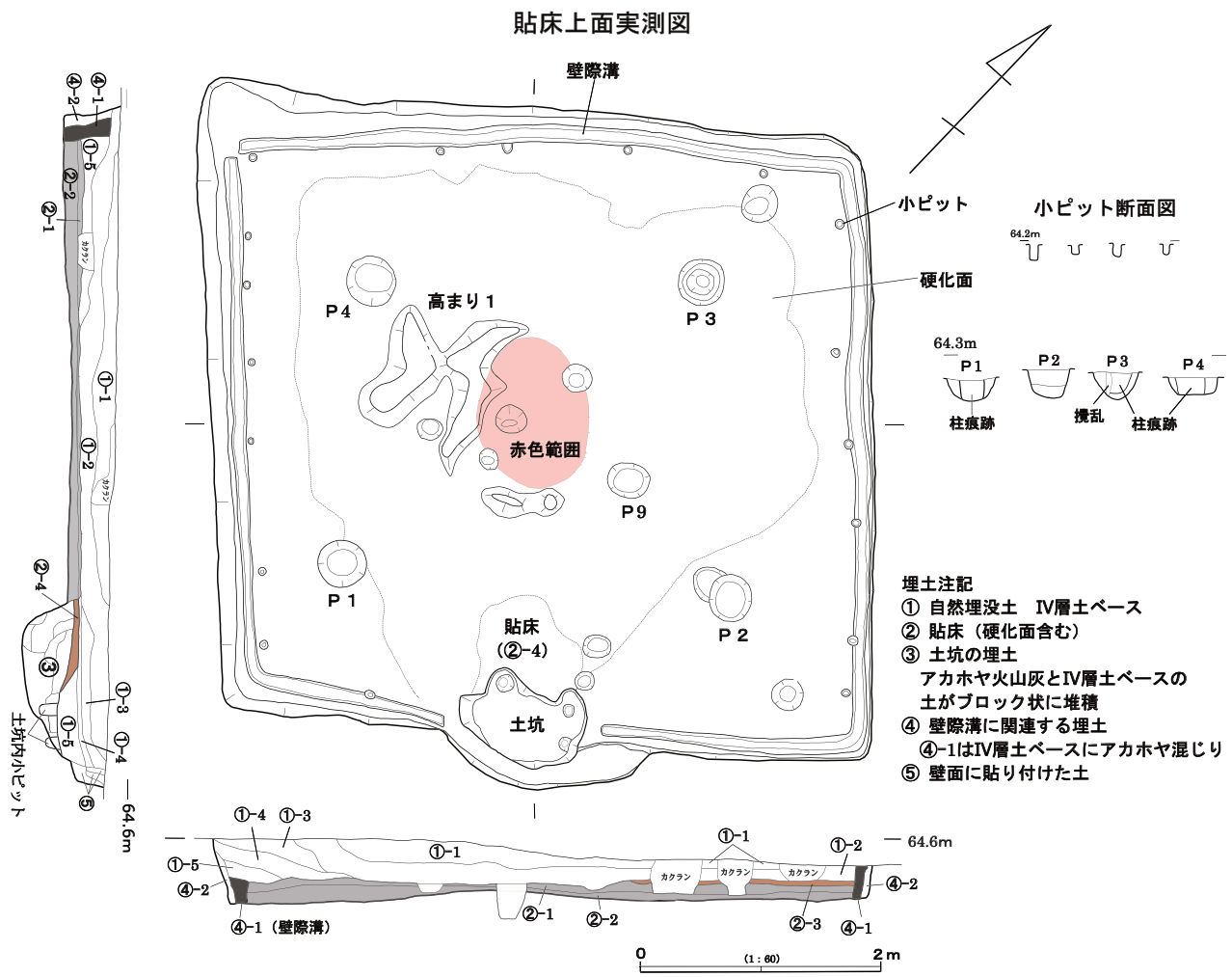
住居は、竪穴中央部を残して深く掘り込んだ後、その上に厚さ16cmの貼床を造っている。竪穴中央部を掘り残す構築方法は、串良川の対岸に立地する川久保遺跡でも確認されている（公財鹿埋セ2023）。中央部の高まりには、屋内炉が存在した可能性があり、意図的に掘り残したものと考えられる（第2図下）。

貼床は3層に分けて造成しており、その上面には、硬化面が住居内全体に形成されている。中でも土坑北側の貼床②-4は著しく硬化している（第2図上）。この貼床は、土坑掘削の際に出たVI層土を利用した可能性がある。

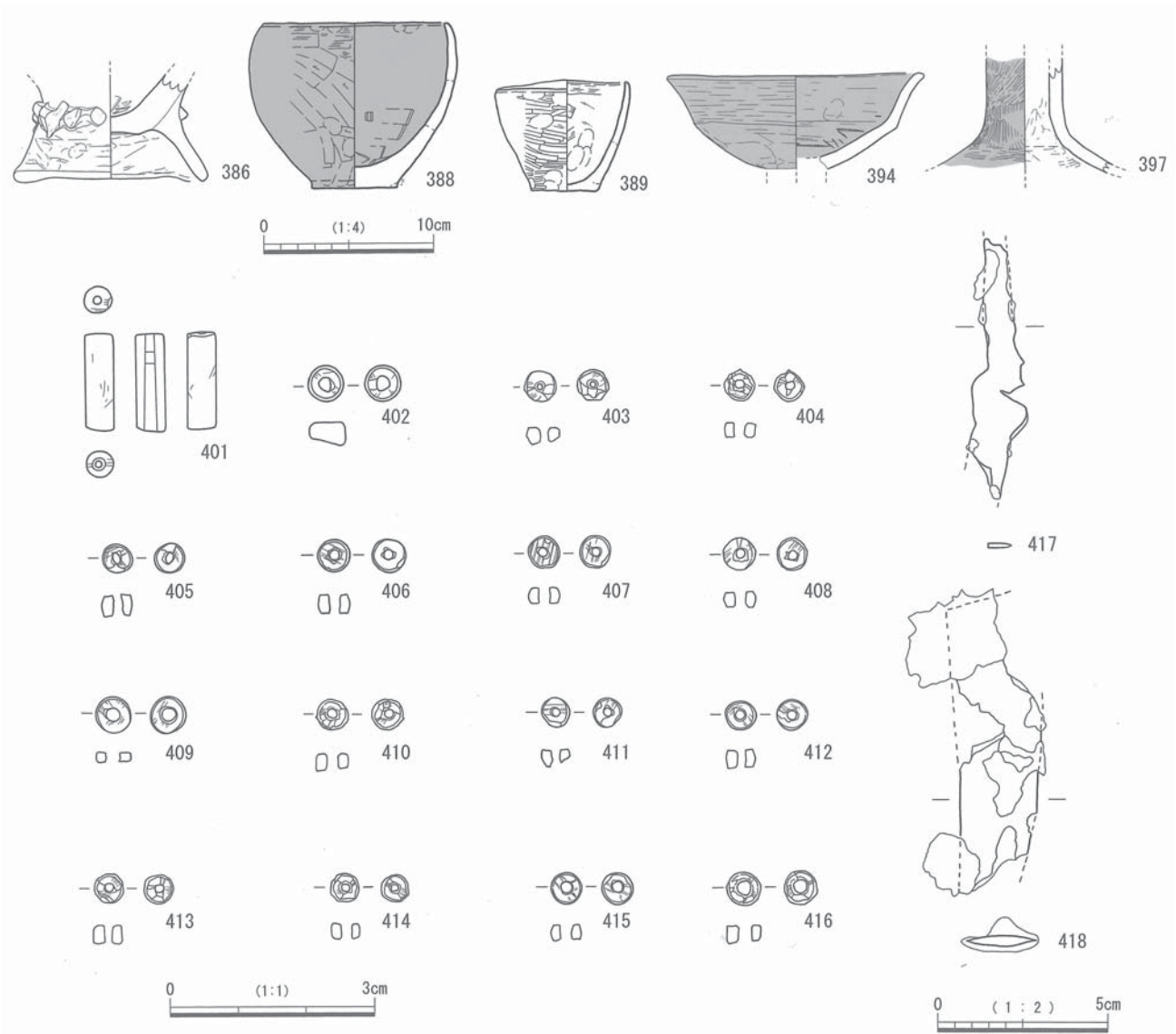
住居の中央部分には、高さが20cm程高い部分（高まり1）がみられた。高まり1は地山を削り残すことによ



第1図 遺跡位置図



第2図 貼床上面出土遺物



第3図 貼床上面出土遺物
(遺物番号は報告書掲載番号)

て形成され、この部分は貼床が薄くなっている。高まり1の東側には、赤く変色した焼土のような埋土が広がっていた。炭化物は確認できなかったが、屋内炉を撤去した痕跡ではないかとの指摘を受けた2)。

(4) 柱穴について

柱穴は貼床上面で検出した(第2図上)。検出した柱穴のうち、P1~P4は、規模と配置から主柱穴と考える。柱穴の埋土は、VI層土をベースにし、アカホヤ火山灰が少量混じっている。P1・P3・P4・P9では、柱痕跡が確認できた。なお、壁際溝に伴う小ピットの埋土も柱穴と同じである。柱穴から遺物は出土していない。

(5) 壁際溝について

壁際溝は、土坑以外で住居内を取り巻くように検出された。特に東側がはっきりと確認でき、幅12cm、深さ10cm程である。壁際溝からは、埋土④-1が直立するように立ち上がっており、壁際溝に嵌め込んだ木材痕跡と判断した。木材が残ったまま住居の自然埋没が始まっている。

木材痕跡と壁面の間には、隙間を埋めるために土を入れて壁を形成している埋土④-2が確認できた。

壁際溝に並列する形で直径6cm、深さ10cmの小ピットが検出された。壁際溝に設置した板などを固定するための杭列と考えられる。

(6) 土坑について

土坑は住居の南壁近くで検出された(第2図上)。土坑に隣接する南壁は外側に張り出している。掘り方の規模は、長軸1.96m、短軸1.6mで、貼床から深さ0.4m程掘り込んでいる。埋土は、アカホヤ火山灰と、VI層土をベースとする土がブロック状に堆積している。堆積状況から、人為的な埋め戻しが行われたと判断した。

土坑の北側は一部埋められた後、貼床②-4となっている。また、土坑の南壁には、埋土⑤を貼り付けている状況が確認できた。

土坑を掘り下げ中に、径10cm、深さ15cmのピットが③層上面で、3基検出された。ピットの掘り込みは、土坑内で



写真1 完掘状況（貼床上面）



写真2 壁際溝検出状況

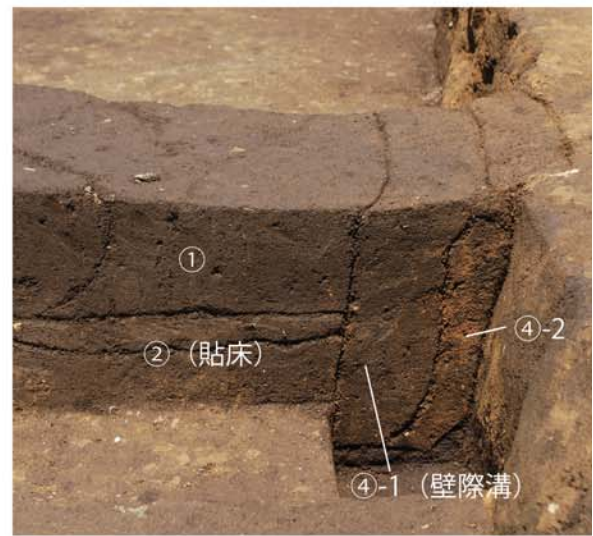


写真3 壁帯溝土層断面



写真4 土坑土層断面



写真5 壁際溝に伴う小ピット

止まっている。土坑内に杭状の構造物を設置し、その周囲を埋めた可能性がある。

土坑は、周囲に壁際溝が巡っていない。このため、壁側に遮蔽物がなく出入りが容易な場所にあるため、出入口に関連する施設と判断した。土坑北側の貼床が著しく硬化していることは、着地のため頻繁に踏み締められたことによるものと推測される。土坑内部には小ピットが検出されており、杭状の構造物が設置されている。土坑は、壁と硬化面の間にあり、梯子などの昇降施設を設置するために掘削されたものと考えられる。

3 まとめ

SH20の調査成果の特徴について2点まとめておきたい。

1点目は、出入口や壁際溝など内部施設が確認できることである。竪穴建物跡の出入口を特定することは意外と難しく、本調査例は、内部施設を検討できる良い事例ではないかと考える。弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡では、壁面近くに土坑が検出されることがある。その多くは、用途不明であり、発掘調査時に、住居の出入口との関係を検討してみるべきである。

また、壁際溝については、板壁を造るために木材を嵌め込んだ痕跡と判断できる。土が露出した竪穴壁面の崩落防止や、湿気対策など居住性の向上を目的としたのであろう。

2つめは、貼床直上の出土遺物の評価である。貼床上面では、鉢形土器、高坏、玉類、ベンガラ、鉄器が出土している。特に玉類の出土が多く、通常、以下の状況が想定できる。

- ① 竪穴内で管玉類、ベンガラ、鉄器を製作していた可能性
- ② 竪穴内で祭祀が行われた可能性

調査状況としては、①の製作に関わる道具類等が確認されなかったため、②の可能性が高いものと判断した。志布志市春日堀遺跡（公財鹿埋セ2020）、大崎町荒園遺跡（公財鹿埋セ2017）では、竪穴住居内で焼失行為や土器・鉄器を使用した廃屋儀礼が行われている。

周辺の調査状況から、SH20で出土した土器や玉類、ベンガラ、鉄器は、住居廃絶に伴う廃屋儀礼に伴って使用・廃棄されたと考えられる。このように考えると、出土した異形鉄器（417・418）や赤色の強い丹塗高坏（397）は、祭祀用に製作された可能性もある。また、竪穴中央部にみられた変色部は、廃屋儀礼に伴って片付けられた屋内炉の痕跡である可能性を指摘できる。

4 おわりに

近年、古墳時代の廃屋儀礼を行った住居跡が、東九州自動車道建設に伴う発掘調査によって確認されている。これらの事例は、建材の焼失行為を伴うもので、宮崎平野・都城盆地と同時期に出現している。本遺跡の住居跡は、焼けた痕跡はなく、古墳時代の大隅半島には焼失行為の

有無によって2種の廃屋儀礼が存在している可能性がある。

同様の調査事例は増加すると予想されるため、最後に1つ課題を指摘しておきたい。本県の発掘調査報告書には竪穴建物跡の遺物について、出土位置の説明がないものが多い。特に床面直上で出土した遺物の特定ができず、遺構の時期や性格を検討することが困難である。後々の検証のためにも、床面で出土した一括性の高い遺物を発掘調査時に把握し、発掘調査報告書に明記することが必須である。

註

- 1) 住居跡の平断面図については、原図を基に再トレースを行った。そのため、土層断面図等が報告書掲載図面と一部異なっている。
- 2) 鹿児島大学中村直子教授御指導指摘謝辞
本論を作成するにあたり、実測図や写真、出土遺物等の探索については、北園和代氏、賦句博隆氏のご協力を頂きました。また、多くの玉類や小ピットを発見できたのは、丁寧な調査を心懸けていただいた調査員、発掘作業員のお陰です。末筆ではありますが、関係者に感謝申し上げます。

引用・参考文献

- （公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2017『荒園遺跡1』（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書12
（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2023『川久保遺跡5 A地点』（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書53
（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2020『春日堀遺跡1 縄文時代中期～近世編』（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書32
（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2022『小牧遺跡3』（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書46

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第16号

※なお、本研究紀要は査読誌です

発行年月 2023年11月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <https://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1
